

4. 新しい森づくり

今日のように、広域的、かつ急激な都市化、産業立地化に対しては、従来の平面的な緑化方法だけでは対応しきれなくなっている。これから望まれる緑地の多くは、今までのように、単なる観賞や慰安の為だけの緑地ではなく、より多様な環境保全、環境変化の生きた警報装置、災害防止などの多様な機能を備えた緑地、すなわち新しい環境保全林が必要とされる。今までの多くの緑地は修景、観賞、慰安、娯楽などの美的機能しか考えられていなかった。これらの緑地の持つ意義も大きなウエイトを占めているが、周辺が都市砂漠、産業、交通諸施設砂漠化しかねない人工諸施設のまわりや中には、人間が生存する上でもっとも必要とする森林形態の緑地を形成していくことが重要である。森林は植物生命体の機能をもっとも効果的に発揮可能な形態である(p. 12~22)。したがって森林と組み合わせられた緑地が形成されて、はじめて修景やレクリエーション等を目的とした緑地もその機能を十分に果たさせることができる。

1) 多様な機能を発揮する「森」としてのみどり

都市や工業地帯における緑地には、第一に防災や環境保全の機能が望まれる。しかし、今日都市や工業地帯における緑化の現状はごく一部を除きほとんどが修景や娯楽の場などの機能しか果たし得ないような緑地が形成されている。たとえば都市公園の多くは防音機能の低い緑地帯で囲まれているために、外界の騒音が公園内部にまで侵入してくる。また、周辺の道路や非生物的な建造物が視界に入ってくるといった状態であり、本来の意味のレクリエーション地域とはいえない。工場の緑地帯においても同様である。単に緑化の名目で樹木を一列あるいは数列、規則正しく列植しているところが多い。このような緑地帯では、発生源対策を徹底させ、それでも残った騒音や塵埃、その他の公害防止、あるいは抑制する機能や居住区と工場群の間に生きている緑のフィルターを形成するといった多様な機能はきわめて低くなる。ここでも工場緑化の本来の目的は果たされていない。これらの場所において緑地の本来の機能が果たされることによって、その内部に設置されたレクリエーションの場としての緑地も大きな意味をもち、その機能を十分に発揮できることになる。

2) 息の長い庭園美より学ぶ

古くから残されている金閣寺などの我が国の名園といわれる多くの庭園も基本的には現代の環境保全緑地としても理想的な形態をとっている。周辺部は郷土種の高木を主体とした森林に囲まれ、その手前、あるいは内部に人工美の極致といわれる庭園が展開されている。たとえば、本田技研株式会社浜松製作所に近い静岡県引佐郡引佐町井伊谷の竜潭寺の庭園が例に示される。この庭園は江戸時代初期、延宝四年に本堂が再建された時に作庭されたと伝えられている。山畔を利

用し、それを築山とし、枯滝を四ヶ所に構え、細長い池を配している。築山および護岸の石組は豪健であり、当時代の名園、静岡県下一の名園といわれている（井上・伊藤 1972）。この竜潭寺の庭園も周囲、とくに庭園の背後は、郷土種であるイチイガシ、アラカン、サンゴジュなどの常緑広葉樹を中心とした幅は広くないが、長い森で囲まれている。竜潭寺庭園は森と本堂との間に作庭されている。竜潭寺庭園を囲む森も、幅がわずか数mである。もし、庭園の背後に森が配置されていず築山と池だけの庭であったとすれば、護岸や滝口の石組が豪華であっても、地割が素晴しくても竜潭寺の庭園は今日まで長い間にわたって、これ程の高い評価は与えられなかったであろう。外界から森林によって遮断され、背景の自然林と人工の自然の模写が調和したことによって寺院の庭園の価値も高めているものと考えられる。また欧米の公園、庭園などについても同様である（鈴木 1978）。現在都市公園の多くのものは、フランス式庭園的（人工的）なものといギリス式庭園（自然を生かした庭園）の調和により、多くの人々の憩いの場を形成している（関口 1970）。これらの古い庭園様式からもわかるように、古くから存続している緑地の多くは全域を修景や憩いの目的で造るのではなく、あくまでも外周は多様な機能、とくに遮蔽や防音、防災といった環境保全機能をもった森林で囲み、その内部に修景や憩いなどの目的をもった緑地が造られてきた。しかし、現在の多くの緑地は修景や憩いの場としての機能しかもたない緑地である。しかも、これらの緑地の多くは継続的に人為的管理が必要とされている。さらに単層群落の緑地



Fig. 3. 鎮守の森として残されている自然林（浜松市和地町曾許乃御立神社）。
Als Shintoistischer Schreinwald erhaltener naturnaher Wald mit *Castanopsis cuspidata*, *Quercus glauca* u. a. (Stadt Hamamatsu).

では森林のような多層群落の緑地に比較して果たし得る機能ははるかに劣る。したがって環境保全緑地としての機能をもつ緑は管理費がかからずに、しかも最大限に緑の機能が発揮できる自然林構成種による森林を形成することが効果的である。具体的には潜在自然植生がヤブツバキクラスの植生域であれば、シイ林、タブノキ林、カシ林など常緑広葉樹林のような冬も緑の多層群落を復元することにより、森林の本来の多様な機能を十分に発揮させることができる。しかも、その土地に合った郷土種を使用することによって時間と共に発展し、安定度を増し、その土地固有の郷土景観を形成することが可能である。

今後急増すると予想される環境保全林の需要に対しては、生態学的、植物社会学的研究を基礎に、植栽樹種の選定、植栽地の土壌条件の改良、植栽後の管理計画等の策定が必要になってくる。大規模な環境保全林を安い費用でしかも管理費をかけずに形成するには、従来手法では不可能である。新しい環境保全林形成には、短時間で大面積の植栽ができ、将来は人為的管理を必要としないで、時間と共に確実に発展し、安定した多様な機能をもつ森づくりの方法がより理想的である。この新しい環境保全林の身近な実例としては、各地に残されている鎮守の森があげられる（宮脇他 1979）。鎮守の森は古来、神域として無秩序な人為的干渉を防ぎ、地域の住民によって慎重に守られてきた。すなわち、一切の人為的管理が停止されても、今日まで自然に近い森が自立生態系として存続している。今や、この我が国の伝統的な鎮守の森を基本とした「ふるさとの森」は、生態学的、植物社会学的研究を基礎として、多様な機能をもった新しい環境保全林として各地で誕生しはじめている。